

70年代、了了の日本という装飾をつけて了了偏
 略の道に進む日本帝国主义支配階級は、日本、世界の人
 民と、戦争とファシズムの渦中にひき入れようとしてい
 る。近代化、合理化という発展的辞藻をもつ言葉で表
 現される現在の社会体制産業構造の再編過程は、労働者
 の労働強化、合理化、官僚体制の強化、自衛隊の強化＝
 帝国主義軍隊の強化、科学技術の領域での国家統制等、
 着実に了了偏略の準備段階を完了しつつある。

現在の支配構造は、極端な暴力支配による反
 帝統一戦線の崩壊の暴力的破壊である。さらに言う
 べきことは、国家権力、地方自治体など暴力キャンペーン
 を流布させて、民主主義、平和の幻想を再世させている
 暴力、破壊と保全とを並列に位置させ、日常生活の安
 全性＝諸個人の権利を満足させる。さらにマルジョ了政
 治委員会、人間本意の政治と標榜し、国家による公害
 の処理等に見られる共同の理想体、21世紀の大国として日
 本を宣伝している。諸個人のエゴを媒介として、現実的
 な主体であるべき人間を客体に転化させるマルジョ了

イデオロギー（私的所有にもとづく価値観）が、マルジョ
 了の諸利益を拡大することに日常的関心をもたせる。総体
 及細分化された山村の中で、体制双方の既得権の拡大と
 改革と、限定された主体的活動が許容されるという社会秩
 序体制である。

現在、全世界の規模でカンボジアへの米軍侵入に対す
 る運動は、帝国主義者に対しての戦争政策変更という新設
 ではなく、又69年11月までのようにスエズ運河でもなく、
 恒常的、日常的な体制打倒をのぞいた反帝統一戦線の形成
 と権力奪取の一環である。抑圧支配される階級が自己規律
 と秩序をもつ斗争が全世界的に成熟している。この萌芽的
 な要請の社会体制創設の運動は、日常生活的マルジョ了の
 価値観を内的に矛盾させ、それを克服して、物質化するた
 めに、労働者自身による生産管理、労働者団体の確立のた
 めに、心と軍隊と、流血の斗争を通して、政治的、イデ
 オロギー的準備を蓄積している。

大学斗争の被告(大学当局)を裁け!

6月1日、時計台、医学部タレーヌの2回公判に結集せよ

学生斗争運動は、萌芽的ではあるが、市民社会の深部で
 政治、経済、思想、文化を實踐によって結合させ、要請
 な共同性——分業において孤立分離された人間の結合回
 復の可能性、新しい組織性を實踐したのではなかったか。
 又トナム解放戦線が軍事支配中の農村を根拠地化してい
 るように

学国においては、権力者を導入し、腐敗したカネミ
 でムを保持した大学当局を支配するヒエラルキー下で、
 研究志向至上主義に全生命をかけることをよびながら、
 いる学生という存在は、マルジョ了ジーク要求する労働
 力商品として国家の規定をうける。社会に同化された大
 学の実質は、資本制分業における科学技術開発、労働力
 製造の工場である。

学生が学保斗争に決起したとしても、それは支配階級と
 抑圧人民との外的な対立にすぎない。なぜなら、マルジョ

了ジークな権力支配する現実の生活の領域において、マル
 ジョ了の生産流通体制の拡大再生産、無限のリズムをな
 でているからである。マルジョ了体制、帝国主義的社会体
 制と対決するために民主主義的権利を自己斗争の有利な
 条件とするために、マルジョ了ジークによるヒエラルキーの攻撃、
 空洞化を防衛するのではなく体制の矛盾を積極的に否定す
 る思想的な激さと行動力を現実生活で形成しなければなら
 ない。

全国学生斗争の過程で帝国主義大学であることを公化
 した学国において、大学が現実の教育、研究の行われる
 場にあるにも関わらず、弾圧体制、国家権力の介入を許
 したことを忘れてはならないだろう。

時計台、医学部タレーヌの2回公判は6月1日に行わ
 れる。学生斗争の責をマルジョ了刑法に逆行させて、形式
 的に裁判するとは審判劇である。平和的学国なら見れば、
 この裁判はマンガであろうか。これはマンガであるとすれ
 ば、学国生活とは何であろうか。